
デジモン×魔法少女リリカルなのはクロスエヴォリューション

ネオクリムゾン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デジモン×魔法少女リリカルなのはクロスエヴォリューション

【Nコード】

N1195P

【作者名】

ネオクリムゾン

【あらすじ】

第97管理外世界地球：今ここに魔導師の少女とパートナーを連れた少年の道が交わる。

処女作品です。文も下手で作者は原作はろくに見てないので確実に原作崩壊が起きます。それがいやな人は今すぐ戻る事をオススメします。

(ただいま更新停止中)

プロローグ（前書き）

初投稿です！

プロローグ

? 「リリカルマジカル。ジュエルシードシリアルナンバー21封印！」

? (sealing)

少女、高町なのは、がそう言った瞬間黒い影は消え青い宝石が残った。

? 「それがジュエルシードです。レイジングハートで触れて」

少女が喋るフェレット、ユーノ、の指示に従いレイジングハートを近付けると…

レ「receiv's number XXI.」

そうしてジュエルシードがレイジングハートのコアである赤い宝石に吸い込まれていく。

ユ「よかった…これで…あ……」バタッ

な「フェレットさん!?!」

ユーノは安心したのか…倒れてしまう。なのはが駆けつけようとして気が付いた。周りはクレーターだらけで遠くからパトカーのサイレンが聞こえてくる事に…

な「と、とりあえず、ごめんなさい!」

そう言ってユーノを連れて走って逃げる。

同時刻、海鳴駅

？「たつく…こんな夜中ガキ1人で引越し先に行かせるなんて…
何考えてんだ父さんと母さんは？」

？「俺は何も考えていないに夕食のおかず1つかける！」

少年の愚痴に子供の声で誰かが答えるが周りは人が少なく子供など
少年しかいない。

？「俺もそっちにかけるっつーの」

少年も当然のように答える。そしてポケットから変わった携帯みた
いな物を取り出す。

？「とりあえずさっさと新しい家行くか、ブイモンー」ブイモンー「
分かったよ、大地ー」

今ここに…魔導師とパートナーを持つもの、テイマー…の道が交わ
る…

プロローグ（後書き）

いやゝめっっちゃ緊張したゝ初めまして、みなさん。デジモン×魔法少女リリカルなのはクロスエヴォリューションの作者のネオクリムゾンです！

大「そして俺がこいつが書いた作品の主人公の天野^{あまの}大地^{だいち}だ」
いやゝ初めての作品：一体何人が見てくれるかなゝ？
大「文章力ろくにないくせに」

否定出来ねえ…

大「基本自己満足だからな」

う…別にいいじゃん！自己満足でも！

大「ま…精々心折れんなよ？」

頑張ります！ではここら辺で感想または、脱字、誤字のご報告をお待ちします！駄文ですか最終回まで付き合います！

大「それじゃあ次の話で会おうぜ」

第1話 空と大地の出会い（前書き）

第1話投稿。暇な人は見てください。

第1話 空と大地の出会い

なのはSide

私、私立聖祥大付属小学校3年生の高町なのは。どこにでもいる普通の小学生だったんだけど…フレットを拾って魔法少女になりました。フレットのユーノ君が言うにはジュエルシードっていう危険な物が海鳴市にばらまかれたから手伝うことにしたの！早速ジュエルシードの反応がした神社にきたんだけど…

「がああ！」

な「な、何あれ？」

青い大きな狼さんがいましたの…

ユ「恐らく原住生物に取りついたんだと思う。それで暴走してしまっただ…なのは！レイジングハートの起動を！」

な「えっと…どうやってやるの？」

ユ「我はのパスワードから！」

な「えー！？あんな長い覚えてないよ！」

あんな長いものとてもじゃないけど覚えられないの！

ユ「何だって！？仕方ない、僕がパスワードを言うからそれを復唱し…なのは！後ろ！」

な「え!？」

後ろを振り向くと青い狼が大きな爪を振りかぶっていました。やられる! そう思ってたら、レイジングハートから声が聞こえてきたの。

レ「プロテクション」

桃色の薄いバリアみたいなのが私を守ってくれたの! でもバリアには少しヒビが入っちゃったの…

レ「マスター、私を使ってください」

な「え…でも…」

レ「私の名前を呼ぶだけでいいです」

な「う、うん! レイジングハート! Set Up!

なのはSide Out

ユーノSide

ユ「なんて才能だ…」

僕は思わずそうつぶやいてしまった…パスワードもなしにやってしまっうなんて…

な「ユーノくん! これからどうすればいいの!？」

なのはの言葉に僕は意識を戻す。そうだ! 今はジュエルシードを封印しない…

ユ「昨日と違って原住生物に取りついていてるみたいだから、攻撃魔法を使ってある程度弱らせないと…」

僕はあまり攻撃魔法が得意ではないからなのはに頼るしかない…

な「分かったの！どうすればいいの？レイジングハート！？」

レ「アクセル・シューターと言ってください」

な「アクセル・シューター、シュート！」

なのはの足元に桜色の魔方陣が現れ、レイジングハートの先から桜色の光弾が3個、青い狼に飛んでいった。行ける！と思っていたら…

「がああ！」

な「ふええー！？」

ユ「な！？」

青い狼に当たっても全然効いてなかった…ジュエルシードが取りついているだけあって強い！

な「ユーノくん！効いてないよ！？」

ユ「威力が足らなかったんだ…砲撃魔法クラスの威力がないと…」

僕は砲撃魔法は使えないし、魔法初心者なのはには厳しすぎる…どうすればいい！？

な「なら…レイジングハート！もっと強い魔法は無い！？」

レ「デイベインバスターがあります」

な「分かったの！」

そう言うとなのはの足元には、桃色の魔方陣が浮かび上がった。え、まさか！？

な「ディバインバスター！」

ユ「ええ！？」今度はなのはが強力な桃色の砲撃魔法を放って、当たった狼が吹き飛んだ…とても魔法初心者レベルの砲撃とは思えない！下手したらエースクラスだぞ！？

ユ「よし…これな！？」

吹き飛んだ狼を見て驚いた…多少体に傷は付いているものの、ダメージは殆ど受けてない…

な「全然効いてないの！」

ユ「と、とりあえず1度…「があああああ！！」！？」」

狼が僕たちに向かって吠えだした…これって…

な「ユーノくん…ひよつとしてあの狼…」

ユ「うん…怒ってる」

僕がそう言い終えた途端、狼は僕たちに向かって突進して来た。

ユ・な「「プ、プロテクション！」」

僕となのはは同時にプロテクションを使ったが…

「ガルルああああ！」

な・ユ「うわあ！？（きゃあ！？）」

プロテクションは一瞬しか持たず、僕となのはは大きく吹き飛ばされた…防御系の魔法にはいくらか自信があったのに…

ユ「く…！」

僕が起き上がろうとする前に狼は、なのはに止めをさすつもりなのか口に青い炎を溜め込み始めた…

ユ「なのは…！…！逃げて！」

な「う…あ……」

ユ「Side Out

なのはSide

「がああ！「ブイモンヘッド！」がぐああ！？」

な・ユ「え！？」

狼が私に炎を放つ直前、何か青い小さなトカゲみたいなのが、狼の顎に頭突きして炎を止めてくれましたお陰で逃げ道を無くした炎は、狼の口の中で暴発した…

「へっ！ざまあみろってんだ！」

そう言って青いトカゲが振り向いてきた。青一色かと思ったトカゲは腹と口は白く、額は黄色のVが刻まれていた。そう思ってる内に、私たちに話しかけてきました

「大丈夫か？」

な「えっと…君は？」

「俺？俺はブイモン！」

な「ブ、ブイモン…？」

ユーノくんみたいに別の世界から来たのかな？って思っていると…

「ブイモン！大丈夫か！？」

ブ「ああ！この子たちも大丈夫だよ！大地！」

石段から私と同じ年ぐらいの、大地と呼ばれた少年があがって来ました。この時、この出会いがこの世界に隠された秘密を、知るとは私は思いにもありませんでした…

第1話 空と大地の出会い（後書き）

やっと第1話投稿できた…

大「内容の割に遅いんだよ、しかもまだ戦闘に入っていないし」

それはあれだ。引くって奴だ

大「一体何人が注目してくれるんだろうな？」

分からない…出来るだけ多くの人に見てもらいたいが…

大「望みは薄いな」

はつきり言ってくれるな…

大「中途半端な励ましは逆効果だからな」

ドライだな…本当に9歳か？

大「お前がそうしたんだろが！」

まゝ、じゃ…この辺で…ありがとうございました！

第2話　ブイモンと大地の力！ブイモン進化！（前書き）

第2話投稿です！

第2話　ブイモンと大地の力！ブイモン進化！

大「おいおい、お前ら大丈夫か？」

そう言って大地はなのはを起こそうと、手を引っ張る。

な「え、えっとあなたは…？」

大「俺は天野大地。ティマーだ」

な「テ、ティマー…？」

なのはは聞いたことのない単語に少し困惑する

大「そ、ま詳しい話しはこの後だ。まずはあいつを退治しねえとな…」

そう言って大地はポケットから、変わった携帯みたいな物を取り出し、青い狼にかざす。すると画面が大きく表示され、狼の映像が現れる

ガルルモン、世代／成熟期、属性／ワクチン種、必殺技／フォックスファイヤー、得意技／フリーズフング、アイスウォール、ガールスラスト

狼のような姿をした獣型デジモン。その体毛は伝説のレアメタルと言われているミスリルのように硬く、肩口から伸びるブレードは鋭い切れ味を持っており、触れるものを寸断してしまう。極寒の地で鍛えられた筋肉と激しい闘争本能を持ち、肉食獣のような敏捷性

と標的を確実に仕留める正確さを持っており、他のデジモンからは恐れられている存在。しかし、知性が非常に高く、主人やリーダーと認めた者に対しては忠実に従う

必殺技は口から吐き出す高熱の青い炎『フォックスファイヤー』だ
大「ふゝん。成熟期ねえ：ブイモンを進化させる必要はなさそうだな：」

な（進化？）

ブ「ちょっと待てよ！大地！1人で戦うつもりか！？」

ユ「そうです！危険です！」

ブイモンとユーノは大地の心配をするが：

ブ「ずるいじゃねえか！俺に戦わせろ！」

ユ「そっち！？」

違った。ブイモンは自分が戦えなくなることを、心配してるのだった。

大「いいじゃねえかよ：ここんとこ戦ってなかったしな：」

ブ「よくない！俺が戦えない！」

ユ「いえ、どっちにしろ危険です！言い争っている内にあの：！？」

狼が襲ってくると言おうとして言えなかった。

何故なら狼、ガルルモンは細いワイヤーみたいなもので縛られてい

た。

な「な、何これ？」

ブ「よっしゃ！俺の勝ち！」

大「ちっ、パーじゃなくグーだしときゃ良かった…」

どうやらジャンケンで決めたようだ。大地が悔しがる。どうやらこの大地と言う少年、バトルマニアのようだ。その間に青いトカゲみたいなもの、ブイモンがウキウキ前に進み出る。

大「しゃーねえな…よっと」

そう言っただけはガルルモンを縛っていた、ワイヤーみたいなものを外す。

ユ「え！？何で」

大「あれじゃあ、まともに戦えねえだろ？」

ユ「でも…「ガルル！」！」

ユーノの声を遮るように、ガルルモンがブイモンに突進して行く。

な「危ないの！」

大「ふっ…」

なのははブイモンの心配をするが、大地は余裕の笑みを浮かべ携帯みたいなものをブイモンに向ける。

大「ブイモン、進化だ！」

大地が叫んだ途端、携帯みたいなものから青色の光がでてそれがブイモンを覆っていく。するとブイモンの皮膚が剥がれ、ブイモンのデータが書き換えられていく。そして覆っていた光が爆発するように消えると、ブイモンが大きく成長し、頭に尖った二本の角、さら鼻の頭にも同じような角が一本。胸に青くVが刻まれた竜一ブイドラモンがいた。

ブイドラモン、世代／成熟期、属性／ワクチン種、分類／幻竜型、必殺技／ブイブレスアロー、得意技／マグナムパンチ、カッターシユート、ハンマーパンチ

古代種と呼ばれる珍しい種族のデジモンの中でも特に珍しいデジモン。成熟期の中では最高クラスのパワーを持ち、感情が昂ぶった時には完全体以上のパワーを発揮する。必殺技はV字型の光線を放つ『ブイブレスアロー』だ

な「何々！？何が起きたの！？」

ユ「姿形が変わった…？魔法？いや魔力は感知しないし…レアスキルなのか？」

なのはとユーノは目の前で起こった現象に付いてこれずに混乱しはじめてきた。

ブ「行くぜおら！」

そう言ってブイドラモンは、ガルルモンに向かってかけていく。

ガ「ガルルアア！」

ガルルモンもブイドラモンに、向かってかけていく。

ガ「ガアア！」

ガルルモンはブイドラモンに噛み付こうとするが

ブ「遅え！」

あっさりとかわされてしまう。

ブ「今度はこっちの番だ！マグナムパンチ！」

ガ「ぐがあ！？」

ブイドラモンがガルルモンに強烈なパンチを放つ。それをまともに受けたガルルモンが、苦痛の悲鳴をあげながら吹き飛んでいく

ブ「いえい！」

ユ「な…何て威力だ…」

ユーノはなのはのディバインバスターをくらっても、ダメージを与えられなかったガルルモンにダメージを負わせたブイドラモンに畏怖の念を抱く。

ユ（なのはのディバインバスターは軽く見ても、AAクラスの威力はある…それをあの竜はパンチ1発で上回った…実力が段違い過ぎる）

ガ「ぐるる…ごおお！」

ガルルモンは勝負に出たのか、先ほどのはたちに放とうとした青い炎を、口に溜め込み始める

ブ「なんだ？もう終わらせるのか？なら俺も…」

ブイドラモンの口にも光が貯まっていく

ブイドラモン「くらえ！ブイブレスアロー！！！」

ガ「がああ！！！」

ブイドラモンが口からV字型の光線を放つのと同時に、ガルルモンが口から青い炎を放つのは同時だった。

な「きゃあ！？！」

ユ「うわあ！？！」

なのはとユーノは、ブイブレスアローとフォックスファイヤーがぶつかり合った衝撃で転がるように吹き飛んでいくが、大地は平然と立っている。そうしているとガルルモンがフォックスファイヤーの威力を高めてブイブレスアローを破ろうとしているが、それでもブイブレスアローは破れず最後にはフォックスファイヤーごとガルルモンをブイブレスアローが貫いた。

ガ「があああ！？！」

な「ひっ！って…にゃ！？！」

なのははガルルモンが貫かれた光景に目をつぶり、ついでに滑った。貫かれたガルルモンは悶え苦しむように、光になって消えていった。後には人の顔ほどの大きさがある青い卵と、ジュエルシードらしき青い宝石が残った

大「うん？片方はデジタマだが…こっちの宝石はなんだ？」

そう言って大地は宝石を拾おうと近づくが、その前にユーノが大地を呼び止める

ユ「あ…待ってください！」

大「なんだ？イタチモドキ？」

ユ「イ、イタチって…僕は一応フレットです！」

大（一応ってなんだ…）

大地は疑問に思ったが、口に出さないことにしておいた

ユ「と、とりあえずそれに触れるのは危険です！」

大「じゃあどうしろってんだ？」

ユ「それはなの…は？」

ユーノはなのはにジュエルシードを封印するように促そうとするが、肝心のなのはが、

な「ふにゃあゝ」

こけてどこかにぶつけたのか、目を回していた。

ユ「なのは！しっかりして！」

それを見たユーノが慌てなのはを起こす

な「ふえ！何！？」

ユ「ジュエルシードを封印して！」

な「う、うん！リリカルマジカル。ジュエルシードシリアルナンバー120封印！」

レ「封印」

そう言うジュエルシードがレイジングハートに、吸い込まれていく

大「へー、すげえな。まるで魔法だ」

ユ「まるでじゃなくて、本当に魔法なんです」

大「どういうことだ？」

ユ「それを今から説明します…ですが…」

大「ああ分かってる。俺もデジモンについて説明するぜ…」

そう言って大地たちとなのはたちは神社を後にする。この後、大地たちとなのはたちはお互いに驚愕する事になる…

第2話　ブイモンと大地の力！ブイモン進化！（後書き）

第2話投稿しました！

大「量の割に遅いんだよ」

これでも頑張ったのに！？

大「ライ：様のところに比べて遅いんだよ。量も少ないし」

ライ様に匹敵するなんて、とてもじゃないけど無理だよ…っていうか後付けしたような様だな

大「敬語苦手なんだよ…」

そーいやそうだったな…

大「お前が考えたんだろうが！」

ま、そこは置いといて、俺があとがきで最もしたかった事をします

大「ああ…あれね」

じゃあ…いっせいのーで、

大・ネ「ライ様、ゼクス様、冥府の死神様、ユタ様、感想ありがとうございます！」

言えた…とうとう言えた！

大「いちいち感動してんじゃねえよ…後1つ聞きたいんだが…」

なんだ？

大「本編の俺ブイドラモンに進化させなくていいって言ったけどさ、あれどういう事だ？」

ああお前設定上、武器持った実力的には成熟期に匹敵するから

大「…………マジ？」

大マジ。武器を持っているとはいえ、世界最強の9歳だ。高町家で言えば恭也に匹敵する

大「強いんだな俺…武器ってなんだ？」

それは次回の秘密

第3話 デジモンと魔導師の説明（前書き）

台本書きやめてみました＋初予約掲載…うまくいってるかな？

○ 〓 心の声 □ 〓 念話でお願いします

第3話 デジモンと魔導師の説明

「んじゃあ…どっちから説明する？俺は別にどっちでも構わないが…」

大地がそう質問すると、それにユーノが返答する。なのはは交渉をユーノに任す事にした

「では、貴方たちから説明してくれませんか？」

「ま…良いだろう」

そう言っただけは先ほども見せた、携帯みたいなものを取り出し叫ぶ。

「ブイモンリライズ！」

そう叫んだ途端、携帯みたいなものの画面から先ほどもいたブイモンが出てくる。

「ふう、やっぱり外の方がいいな。D-アークの中窮屈だから…」

「ふええ！？いなかったと思ってたら入ってたの！？」

「ああ、そうだ。D-アークは、デジモンを進化させるだけじゃない。デジモンや物をしまうことが出来るんだ」

「そ、その前に、デ、デジモン…？ってなんなの？」

なのはがおずおずとそう聞くと、ブイモンが大地に

「大地、説明任せた」

「ああ、デジモン：デジタルワールドと呼ばれている、コンピュータネットワーク上の電脳空間に生息する生命体、デジタルモンスター、略してデジモンだ」

「コ、コンピュータネットワーク？」

「で、電脳空間？」

なのはとユーノはこの時点で意味が分からなくなっているが、大地は構わず続ける

「そうだ。デジモンの誕生には色々な説があるが、一番有力とされているのが、ハッカーがコンピュータ上でサイバーテロを行うために人口知能を備えさせたウイルスを広めたのが始まりだと言われている」

「言われているって…断言できてないじゃないの！」

なのはが突っ込むと、大地は声を荒げて返す

「うるさいな！そもそも人づて聞いた話だから分からないんだよ！」

「人づてって…君は誰から聞いたの？」

ユーノがそう聞くと大地は簡単に答える

「父さんと母さんだ。この2人もティマーだからな」

「ティマーってそもそも何なの？」

なのはが再び質問するが、それに大地は肩を震わせて返す

「いちいち質問するな！鬱陶しい！一から説明するから質問は最後にしろ！」

「は…はい！」

大地の剣幕になのはとユーノは、授業を受ける生徒のピシッとする。それに対し大地も教師のようにピシッとする

「いいか？まずデジモンの存在について答えるぞ？一言で言ったらデジモンは進化する生き物だ。進化って言ってもリアルワールド…まあようはこの地球の事だ。地球の生物と違ってその個体が自らの構成データを、大きく書き換え成長する事をさす。そしてデジモンは戦い、より強力な存在に進化する。分かったか？」

「は…はい！」

なのはとユーノは半分ほど分かってないが答える。それを気にせず大地は続ける

「次はティマーだ。ティマーってのは本来戦うことで進化するデジモンを、絆によって一時的に進化させる人間の事だ。ティマーはパートナーとなるデジモンを見つけ、一緒に戦い絆を結ぶ。デジモンにも色々な種類があるからな。ブイモンを例に紹介しよう」

そうやって大地は先ほどから静かなブイモンに、Dーアークを向ける。すると先ほどガルルモンの時と同じようにデータが表示される

ブイモン、世代／成長期、属性／フリー、分類／小竜型、必殺技／ブイモンヘッド、ロングソード、得意技／ブンブンパンチ、ホッピングキック

額のV字が特徴的な小竜型デジモン。数少ない、古代種、デジモンの一匹。古代種の成長期の中でも高い戦闘力を持っている。性格はイタズラ好きでやんちゃだけで、デジメンタルを使って、アーマー進化すると爆発的な力を発揮する。必殺技は強烈な頭突きを食らわせる『ブイモンヘッド』とクロンデジゾイドで作られた剣で切り裂く『ロングソード』だ

「まず世代ってのは進化の段階をさす。誕生から順に幼年期Ⅰ、幼年期Ⅱ、成長期、成熟期、完全体、究極体の6段階に分類される。たまに例外的な進化にハイブリッド体やアーマー体ってのがあるらしいが、詳しいことは俺は知らない」

そうやって大地は一息をつける

「続けるぞ。次は属性だ。デジモンは大部分がデータ種、ウイルス種、ワクチン種の3属性に分かれる。これらはジャンケンの関係に似ていて、データ種はワクチン種に強く、ウイルス種はデータ種に強く、ワクチン種はウイルス種に強い。ただたまにブイモンのように属性がフリーの奴がいる。種族…これは俺も詳しく知らないから置いておこう…これで俺の話は終わりだ。何か質問はあるか？」

大地がそう聞くと、なのはが手を上げる

「なんだ？」

「えっと…あの時、ガルルモンって狼がブイドラモンくんに倒されたときに現れた卵は何？」

「ああ、そういや言ってなかったな。あれはデジタマって言ってな。デジモンは死ぬと卵になるんだ。まあ早い話しは転生だ。そのデジタマが孵化しても記憶は残らないしな…質問は終わりか？」

そう大地が尋ねると今度はユーノが右手（右前足？）を上げる

「僕からも聞きたいんだが…」

「なんだ？」

「ガルルモンって狼を縛ったあのワイヤー…あれって一体何で出来てたんだ？あんな細さであの狼押さえておけるとは思わないんだが…」

「なかなかいいところに目をつけるな…あれはデジタルワールドで最も硬いと言われる金属、クロンデジゾイトで出来ている」

「そんなものが…」

「質問はもうないのか？次はお前たちに説明してもらいたいんだが…」

「あ…！はい！まずは僕となのはの力についてですが…」

そしてユーノは話し始める。魔法のこと、自分が異世界からきたこ

と、ジュエルシードを発掘しそれを事故で地球に落としてしまったこと、それを回収しようとして無理だったので魔力を持つ人に無差別にSOSを送ったことを…

「ふくん…質問する前に一言言わせてもらいたいのか？」

「な、なんですか？」

ユーノは少しどもりながら喋る

「お前バカだろ？」

「なっ!？」

「だってそうだろう？力が無いのに、中途半端な責任感に押されて来て、でもって力を与える意味が分かってるのか…責任を押しつけるのと同じだ…」

「そ、それは…」

ユーノは大地の物言いに何も言えなくなる。当たり前だ。自分のせいで平和に暮らしていた少女を巻き込んだのだ…罪悪感を感じない方がおかしい

「まあそれは後々反省して次の質問だ。俺にもその魔力って奴はあるか？」

そう大地が聞くと

【ええ…この声が聞こえるならあります…】

【これは…!】

【念話です。魔導師が遠く離れた仲間にも伝えられる伝達手段です】

「ふーん。便利だな」

「あ、あと最後に頼みたいことがあるんですけど…」

「なんだ？」

「ジュエルシードを集めるのに…協力してくれませんか？」

「お前…さっき俺が言ったこと分かってるか？」

「ええ!それは分かってます!ですが…」

ユーノも出来ればこれ以上人に頼りたくなかったが、そうも言ってもらえない。なのはような強力な魔導師ですら相手にならない生物がいる。従って大地達の手を借りるしかないのだ

「手を貸してやってもいいが条件が3つある」

「じょ、条件とは？」

「条件1…俺が手を貸すのはデジモンと高町が手に負えない相手の時だけだ…俺に頼りっぱなしじゃダメだからな…」

「2つ目の条件は…?」

「俺と模擬戦をしろ…高町」

大地の出した条件に、なのはとユーノは驚く。ユーノからしてみれば少々無謀に思えた

「ふええ!?!」

「そんな!?! 無謀ですよ!」

「まあ高町が俺に勝てる見込みは1%程度だが…実力はみておきたい…」

(いえそうじゃなくて…いやこの人だったらありえるかも知れない…)

ガルルモンに1人で勝てるというぐらいだ…実力に自信があるのだろうか…

「3つ目の条件…俺に魔法とやらを教えてくれ」

「か、かまいません…戦力が増えるのにこしたことはありませんから…」

「そうか…じゃあ明日の夜、海鳴公園だ…帰るぞブイモン」

そう言って大地はブイモンに呼び掛けるが何の反応もない

「ブイモン?」

「(――) z z z z z」

「寝てやがる…はあ…」

そう言って大地はブイモンをD—アークにしまう

「じゃあ明日の夜にな」

そう言って大地は夜の闇に消えていく…

「僕たちも帰ろうか…」

「うん…」

そう言ってなのは達もまた夜の闇に消えていく…後には何もなかった

第3話 デジモンと魔導師の説明（後書き）

ネオ「第3話投稿しました！ライ様のアドバイスど台本書きやめてみました！ついでに後書きもちよつと変えてみました！」

大「おい…駄作者…」

ネオ「な、なんだその殺気は？」

大「俺の武器次回で言うって言ったくせに出なかったじゃねえか…」

ネオ「あ…」

大「忘れてたのか？」

ネオ「否定できねえ…」

大「（後書き終わったら殺してやる…）感想返しやっぞ」

ネオ「おう」

ネオ・大「ライ様、冥府の死神様、感想ありがとうございます！」

ネオ「じゃ…また次のお話で」

第4話 意外(?)な場所で再会 そして大地の力(前書き)

久々の投稿です！

説明(言い訳)は後書きで！

第4話 意外(?)な場所で再会 そして大地の力

なのはSide

昨日は色々なことがありました。ジュエルシードを回収しようと思ったら、大きな狼さんに出会わし、私と同じぐらいの変わった少年に出会わし…大きな竜には出会わし…色々なことがありました。今日の夜、海鳴公園で会わすです…

(そう言えば…どこに住んでるか聞いてなかったの…)

「……は…なの…なの…なの…!!」

「にやあ!?!なに!?!いきなり耳元で大きな声出さないで、アリスちゃん!?!」

この子は私の親友のアリス・バニングスちゃん。ちょっと気が強いけど、優しく私の親友の1人です。犬が好きで自宅に何十匹も飼って犬屋敷みたいになっています

「さっきから何度も呼んだじゃない!でもあんたが返事しないのが悪いじゃない!」

「ええ!?!ウソ!?!」

「ホントだよ、なのはちゃん。アリスちゃんがなのはちゃんを、何度も呼び掛けたんだけど…なのはちゃんぼーっとしてるのか返事しなかったよ」

私の疑問に答えてくれたのがもう1人の親友の月村すずかちゃん。

アリサちゃんと同じぐらい優しいです。アリサちゃんとは反対に猫好きで家は猫屋敷になってます。ちなみに、運動音痴の私と違って運動神経抜群です。少しうらやましい…

「それよりなのは。あんた聞いた？今日来る転校生の話？」

「えっ！？転校生が来るの！？」

転校生！？そんな話、初めて聞いたの！

「朝から噂になってるよ？知らないのなのはちゃんぐらいたと思うよ」

ふええ！？そんなに噂になってるの！？

「「うん」」

「心読まれたの！？」

「いや…なのはちゃんさっきから思考が口に出てるよ？」

「え…？」

「あんた気付いてなかったの？」

「ううう…」

恥ずかしいです…穴があったら入りたいの…

「とりあえず、なのはの痴態はほっというて…」

「痴態って何なの！？アリサちゃん！」

痴態はいくら何でも酷いの！

「何でも転校生は生意気みたいね！」

「無視されたの…でも生意気って？」

疑問に思ってたらずかちゃんが耳打ちしてくれました

「何でも編入試験で全科目満点をとったらしいの…」

「ふええ！？満点！？すごいの！」

「だからアリサちゃんがライバル視してるの…」

「なるほどなの…」

アリサちゃんはプライドが少し高いので、ライバル視するのも無理ありません。実際、アリサちゃんがテストはだいたい一位、もしくは二位ですから…私がアリサちゃんより上なのは理数系ぐらいです

「このアリサ・バニングスを差し置いて一位になるなんて…生意気な奴！」

「アリサちゃん…それは言いがかりだと思うな…」

確かにそうだと思うの…

「とりあえず、あたしはそいつに定期テストで勝つ！」

「頑張ってね、アリサちゃん」

「アリサちゃんなら勝てると思うよ」

私がそう言いおえると、ちょうど学校のチャイムが鳴ったので私の席に集まったアリサちゃんとすずかちゃんが自分の席に戻ります。すると担任の先生が教室に入ってきました

「みんな、おはようございます」

「」「」「おはようございまーす！」「」「」

「もう既に知ってる人はいるかもしれないけど、今日このクラスに新しい転校生を紹介します。それでは、入ってください」

「へーい」

あれ？この声は…

「○○小学校から転校してきた、天野…」

「大地くん!？」

私は思わず、その声に出しました

「お前は…高町納豆!」

「にゃああ!？私はそんな臭い名前じゃないの！」

私、そんな名前で覚えてられたの!?
なのはSide Out

大地Side

「にゃああ!?! 私はそんな臭い名前じゃないの!」

あり?名前聞き間違えたか?それにしてもまさか学校で再会するとは…こういうの何て言うんだっけな?そうそう、縁があるってやつだ

「なのは?知り合い?」

「え、えっと…」

どうやら高町はデジモンの事を話してないみたいだな。なら…

「でかい犬に追われてるところを助けてやった程度だ」

「う、うん! そうなの!」

「怪しいわね…そのあなた、本当かしら?」

「本当だぜ」

嘘は言っていない。真実をばかしてある程度だ

「高町さんと知り合いなら、高町さんの隣席に行きますか?」

「そうさせてもらいます。知り合いがいる方が気が楽ですから」

嘘だけだな。実際どこでもいい。高町の隣の席に座る

「よろしくな。高町」

「よろしく大地くん！」

「では一時間目は予定を変更して、天野くんの質問会にします」

担任がそう言った瞬間、俺の机の周りにクラス中の奴が集まる。やけに女子の比率が高いな：

「ねえねえ一体…」「私からよ！」「押さないで…」
鬱陶しい…さっさとしてくれないかな？

「少しは落ち着きなさい！そんなにめちゃくちゃに質問したら、そいつが答えられないじゃないの！」

ありがたい…けど初対面でそいつ扱いか：

「随分酷い扱いだな…お前は？」

「初対面でお前扱いはいいい度胸じゃないの！」

「そいつ扱いしたお前が言えることか？」

「うぐっ…まあいいわ。あたしの名前はアリサ・バニングス」

「アリサ・バニングスねえ…なかなか燃える名前だな」

「誰がバーニングよ！？バニングスよ！」

そう言いながら拳を振りかざしながら俺に向かってくるが、長い紫色の髪の少女に止められる

「落ち着いてアリサちゃん！」

「はなさないすずか！こいつ一回殴らないと気がすまないわ！」

すずかって少女が困ってるし、止めるか…見た目一番好みだし

「あー、間違ってますまない。アリサ・バニグンス」

「バニグンスじゃないわよ！バニグス！」

その後俺はアリサの名字を三回ぐらい言い間違えた

大地 Side Out

大地が転校した日の昼休み

「さて…昼飯にするか…」

そう言いながら大地が弁当箱の包みをあけようとする前になのはが

「ねえ大地くん、お昼休み屋上で私達と一緒に弁当食べない？」

「別に構わないが…私達？」

大地がそう言うと、アリサとすずかがなのはの机に集まる

「ああ…月村とアリサか…」

「あんたも一緒にお昼食べるの？」

「ああ」

「じゃあさっさと行きましょう！」

「屋上」

「「「いただきます」」」

そう言って大地となのは達が手をあわせる。そして大地は早速弁当に手をつけるが、なのは達は大地の弁当を見て目を丸くする

「さーて…ん？お前らは食べないのか？」

「だ、だって大地くんの弁当…」

「ん？ああ、俺小さい弁当じゃ足りなくてな」

「いや、なのはが言いたいのはそこじゃなくて！」

大地が言ったように大地の弁当はなのは達の弁当箱の四倍近い大きさがあがるが、なのは達が目を丸くした理由はそこではない

「あんたの弁当、何で焼きそばだけなの！？」

そう、大地の弁当は焼きそば単品を弁当ぎっしりに詰めてあるのだ

「焼きそばが好きだからだ。他に何か理由があるか？アリサ」

「いや…ん？ あんたなのは達を名字で呼ぶけど何であたしは名前で呼ぶの？」

「バニングスって呼びにくいから」

「そんな理由！？」

意外な理由で名前を呼ばれていることにアリサは思わず叫ぶ

「理由なんてそんなもんだらう？」

「それもそうね…むしろ嬉しいし…」

アリサが最後に言った言葉は声が小さいので、大地には聞かれなかった。しかしそれを聞いたなのは少し慌てるように

「ねえ大地くん！」

「な、なんだ高町？」

「それだったら私も名前で呼んでくれない！？」

「あ、私もそうしてほしいな」

なのはの言葉にすずかも便乗するように言う

「……………分かったよ。なのは、すずか。これでいいか？」

「「うん！」」

なのはとすずかは顔を若干赤くして嬉しそうに答えるが、もう焼きそばを食べるのに夢中になっていた大地は気が付かなかった

—放課後—

「さて…帰るか」

「大地くん！一緒に帰ろう」

なのはが大地と一緒に帰ろうと誘うが

「ああすまん。引っ越ししてまだ整理してない荷物があるんで…」

「そうなの…」

なのははしゅんとし、同時にツインテールもしゅんとする

（こいつのツインテールは感情に反応するのか…？）

「じゃあまたな」

そう言って帰ろうとするが、去りぎわになのはに小声で話しかける

「今夜、10時に海鳴公園でだ」

「…うん」

内容自体は待ち合わせの確認みたいなものだが、なのはは気が重たくなる。当たり前だ。模擬戦とはいえ初めて人と戦うのだ

―深夜10時、海鳴公園―

「きたか…」

そう言って大地が顔を向けた先には肩にフェレットを乗せたなの
が歩いてきてた

「よう約束どおりきたな。じゃあ早速始めようか」

「ちょっと待って」

「なんだ？」

「ユーノくんをおろして、レイジングハートを出したいんだけど」

「ああ、構わない」

「じゃあユーノくん、そこで見てて」

なのはがそう言って、ユーノがなのはの肩から飛び降りる

「ん…なのは頑張ってる」

「大丈夫だよ。ユーノくん。じゃあ…レイジングハート、Set Up
P!」

「Set Up」

なのはがレイジングハートを起動させると、なのはが光に包まれ光

が消えると聖祥の制服を模したバリアジャケットに切り替わる

「準備できた…の？」

なのはが大地に目を向けると、大地は呆れた目でなのはを見ていた

「どうしたの大地くん？」

「なのはお前…恥女だったのか？」

「にゃああ！？なんでそんなことを言うの！？」

「いやだってさ、いきなり裸になって服を着るのはどうかと思うぞ？」

「にゃあああ！？見えたの！？」

なのはが大地に裸を見られた事で恥ずかしく感じるが、ユーノは驚愕していた

（バカな…服が消えてからバリアジャケットを張るまでの間は、ほんの一瞬…それを見たのか！？）

ユーノは大地の動体視力に戦慄を抱いた

「んじゃあやるか…青風リアライズ！」

大地が叫ぶと、D-アークから青く綺麗な刀がでる

（綺麗…）

なのはは青風の美しさに見惚れる

（お姉ちゃんが刀剣マニアなもの、分かる気がする…）

「これが俺の武器、青風だ…準備はいいか？」

「あ！うんうん！いつでもいいの！」

「フレット、開始を合図してくれ」

「わ、分かった。それじゃあ…初め！」

ユーノが開始の合図をした瞬間！

「俺の勝ちだ」

「え…あれ？え大地くんがあそこにいたのにいつの間にな？」

大地がなのはの首に刀の切っ先を向けていた

（は…速すぎる！？魔力反応はなかった…つまり身体能力だけで今のスピードを出したっていうのか！？）

「んじゃあ、今日はどうする？」

「え、えっと…」

大地がマイペースに進めてる間、ユーノは大地に対して考えていた

（天野大地…彼は…一体…）

第4話 意外(?)な場所で再会 そして大地の力(後書き)

ネオ「久々の投稿です！」

大「おい作者……」

ネオ「な、なんだ!？」

大「何でこんなに遅れた!？」

ネオ「テスト期間＋アニメ見てた」

大「なんのだよ？」

ネオ「魔法少女リリカルなのはだ」

大「そうかよ……」

ネオ「これからも魔法少女リリカルなのはをちよくちよく見るので更新が遅れます」

大「あーそうかい……それにしても俺の武器、ようやくでたな」

ネオ「刀なのは俺の趣味です。しかしなのはを圧倒か……強いな」

大「地力と経験の差がありすぎる。こちとら強い奴と戦ったことなんて数えきれないからな……」

ネオ「でもすごい身体能力だな」

大「デジタルワールドは様々な環境を持つからな。以前磁場の影響で地球の10倍の重力を持つところに迷いこんだことがあったな…」

ネオ「よく生きられたな」

大「ブイモンいなければしんどだな」

ネオ「ほんじゃあ話しはここまでにして…」

ネオ・大「ライ様、フィーゴ様、秀雄様感想ありがとうございます
！」

ネオ「こんな駄文だけど、見てくれる人がいるって嬉しい！」

大「ならもっとうまく書けよ」

ネオ「努力します…」

主人公設定（前書き）

なんとなく更新

ネタバレになるのでそういうのが嫌いな人は見なくてもいいです

主人公設定

ネオ「主人公設定を發表します。ちなみにこれは無印での設定です」

名前

あまの だいち
天野大地

年齢

9歳

パートナー

ブイモン

好きなもの・こと

麺類、甘いもの、闘い

嫌いなもの・こと

タコ、イカ、貝、汚い人間

特技

運動、真顔で嘘をつく

武器

希少なレアメタル、ブルークロンデジゾイドでできた刀 銘は『青
風』

名前の由来は父親が使ってる刀、『赤風』を真似したもの。クロン
デジゾイドでできたワイヤー 主に敵を縛ったり、ワイヤーを伝っ
て移動するために使用する

見た目

デジモンアドベンチャー02の、googleのない黒髪の本宮大輔

魔力ランク、AAA

魔力光、スカイブルー

魔力変換素質、秘密

詳しい設定

海鳴市に引っ越してきたブイモンをパートナーに持つ9歳の少年。
見た目は普通の少年だが、思考、身体能力はどう考えても子供のものではない。特に身体能力は馬鹿げてて、御神の剣士である恭也に『人外』と言わしめるほど。この身体能力は様々な環境を持つ、デジタルワールドで戦ってる内に鍛えあげられたもの。しかもまだ子供なのでまだまだ伸びる

ブイモンを完全体にまで進化させることができるが、滅多に進化はしない。下級だが一度、相性の悪いフィールドに究極体のデジモンを誘い込み、成熟期のブイドラモンとの連携で倒してみせたことがある。

大食漢で特に麺類と甘いものはどこに入るんだ？と思うぐらい食べる。戦うことが好きで、よくデジタルワールドでデジモンと戦っている。

嫌いなものはタコ、イカ、貝類で食ったら吐くほど嫌い

過去の経験で汚い人間が嫌いで見ると殺意がわく

真顔で嘘をつくことが得意で人を騙すのが得意である

お知らせ

実は暫く更新を止める事にしました。理由としては原作も知らずに文を書くのはやっぱり無茶があるので、魔法少女リリカルなのはをよく見てから更新する事にしました。それと暫くは文の練習も兼ねて、自分の知っている原作で作品を投稿しようと思っています。

短い間でしたが、この作品に感想をくださったライ様、冥府の死神様、ゼクス様、ユタ様、フィーゴ様、秀雄様、エレ様、ヴェルク・ネオ様、オメガ様、本当にありがとうございます！またいつかきつと『デジモン×魔法少女リリカルなのはクロスエヴォリューション』を投稿します！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1195p/>

デジモン×魔法少女リリカルなのはクロスエヴォリューション

2011年1月21日23時07分発行